

## ヴェーラ・パーヴロワの作品

鈴木正美

### 1. 詩人について Павлова Вера Анатольевна

1963年モスクワ生まれ。グネーシン音楽大学で音楽学を専攻。18歳の時、最初の夫との結婚生活の中からある日突然、詩への渴望がおこった。「それまで私は作曲をしていて、触覚の器官は別物だった。詩が突然やってきた時から、器官はおおい隠されてしまった！アンドリュシャのマメだらけの手で…。詩を書くことは、人に隠すことの出来る唯一のプロセスだった。作曲している時に、あなたの指はピアノの蓋をぱたんと閉めるでしょう？絵を描く時、あなたは紙の上に墨を一気にぶちまけることができる。詩を書いている時は誰も見ていない。特にぼんやりしている夫はね。秘密の目的を達成するために、私はこの触覚の器官に切替わったの」。在学中にモスクワ大学のイーゴリ・ヴォルギンの文学サークルに関わる。このころ出会った2番目の夫となるパーヴロフが彼女の詩を初めて評価した。音楽よりも詩にのめりこんでいった20歳のころにはかなりの分量の詩を書きためていた。

卒業後、教会の合唱団で数年間歌っていた。児童詩スタジオで指導もする。夫ミハイル・パーヴロフは「アガニョーク」の編集者。娘が二人いる。1997年に第1詩集『天の動物』が出版される。翌年第2詩集『第二の言語』刊。そのエロティックな内容は、一部の読者・批評家のたちの間で大きな反響を呼んだ。2000年に第3詩集『切りとり線』刊。第4詩集『第四の夢』で2000年度のアポロン・グリゴリエフ賞を受賞した。ユニークな詩集シリーズを出し続けている「オギ」から2001年、パーヴロワの全作品を収めた『成年』が出版された。

### 2. 作品リスト

#### 詩集

Небесное животное: Стихи. / Сост. Б.Кузьминский. -М.:Журнал «Золотой век», 1997. -256 с.

Второй язык: Три книги стихотворений. -СПб.: Пушкинский фонд, 1998. -64 с.

Линия отрыва: Книга стихотворений. -СПб.: Пушкинский фонд, 2000. -48 с.

Четвертый сон. -М.: Захаров, 2000. -112 с.

Совершеннолетие. -М.: ОГИ, 2001. -352 с.

#### 雑誌掲載作品

Логопедия. *Новый мир*, 1999. №4.

Из книги «Площадь соловецких юнг». *Волга*, 1999. №8.

Попутные песни: Двенадцать вокализов. *Журнал «TextOnly»*, вып.6(2000).

#### アンケート

/Натка, вернувшись из пионерлагеря:/, *Новый мир*, 1999. №2

## インタビュー

Танцюю одна. *Огонек*, 1999. №30 (18 октября).

## ホームページ

<http://www.vavilon.ru/texts/prim/pavlova0.html>

## 参考文献

鈴木正美「身体の一部としての言葉——ヴェーラ・パーヴロワ」 *ユリイカ* 2001年5月号

## 3. コメント

ウラジーミル・ソローキンは「バビロン」へ宛てた書簡で次のような風景を描写している。「ここ日本では、地下鉄にいつも心地よい雑踏がある。華奢な娘たちが立ったまま眠り、エアコンの空気が彼女たちの髪をそよがせる…。口を開けて夢を見ている娘。新宿駅で彼女たちは目をさまし、降りていく。半ば空になった車中に残された私は甘美な喪失感とともに立っている。ヴェーラ、あなたのテキストからはこんな感覚が湧き上がるのです」。ソローキンが感じているのは日常の中に息づくエロスだ。男性の玩具としての扇情的なポルノではなく、女性の身体感覚＝エロスそのものに触れようとするヴェーラ・パーヴロワについて、イーゴリ・シェヴェリョーフは『枕草子』を想起しつつ、「きわめて今日的な、一日を軽々と語ることの出来る伝説の清少納言」と形容している。確かに初期のパーヴロワ作品のほとんどは、ごくありきたりの日常を生きる女性の描写、独白、男性や家族への愛情について平易で簡明な表現で語っている。それはエロティックな短いエッセイ集のようだ。しかし、それは単なるエッセイではなく、ロシア詩の伝統を意識しており、特に言語と身体、女性とエロスというテーマへの深い洞察に満ちている。

私の中でバレリーナが消滅した。

私の中でヒロインが消滅した。

私の中でレズビアンが消滅した。

私の中で黒人女性が消滅した。

なんとたくさんの女たちが私の中で消滅したことか！

そしてプリゴフだけが元気に生きている。

パーヴロワがこの詩をペテルブルグの詩人会議で朗読した時、プリゴフはにこりともせず「おもしろい」と言ったという。この詩は明らかにプリゴフの「僕の前で」(1994)のパロディである。パーヴロワをポスト・コンセプチュアリズムの詩人として位置づけようとする批評があるのもうなずける。例えばイリヤ・ククリンは「セックス、コスモス、意味論的革命」(「独立新聞」2000年12月14日)で次のように述べている。「ヴェーラ・パーヴロワのすぐれた詩のひとつに次の詩句を4回繰り返すものがある。「あなたが何をしようと／あなたは何もしなかった」。パーヴロワは遠ざけられた堅いガラスの言語としてのレトリックを受け入れることをしつけたロシア・コンセプチュアリズム以降に存在する詩人である」。詩の伝統の破壊と再構築という点では、確かにその通りだろう。たとえば「アフ

マートワの模倣」と題する二行詩（「エレベーターの壁の хуй という言葉を／8 回読み返した。」）などはそのいい例だろう。しかし、パーヴロワの詩はこうしたものばかりではない。伝統、特に女性の詩の系譜という点で、パーヴロワはもっと意識的であり、エロスをめぐる言説を相対化しながら、新たな詩的言語を追求している。

大気を鼻孔で紡ぎ／毛玉をきっちり巻き／詩行の布を織った／アフマートワ  
軽々としたものごとを重々しくし／鳥の群れが集まるように／それらを毘として仕掛けた／ツヴェターエワ  
性交の語彙集のために／愛撫の中をルサルカのように泳ぎ／ゆっくりと姿を消した／パーヴロワ

ククリンの言うように、自らを「私、ヴェールカ・パーヴロワ／セクシュアルな反革命家は／性の地下室へ去っていく」とうたうパーヴロワは、性的な意味を言葉にしているのではなく、意味論的に性をうたっているのだ。ククリンはさらにロシアの女性詩人による「二つの出口」について指摘している。ひとつは「女性の詩に習慣的に固定化されてしまった領域（つまり愛——人參——去った——やって来た）から出て行くこと」である。そして、パーヴロワが展開させたのは二つ目の出口である。先ほどの領域を「極限にまで強化したのである。愛について、身体について、天について最大限に。それが出口なのだ。パーヴロワはその誇張法にもかかわらず具体的である」。こうした領域を発展させた女性詩人としてツヴェターエワがすぐに思い出されるが、愛のテーマをどうしても重々しくしてしまうツヴェターエワに比べて、パーヴロワの生と身体性をめぐる言葉はもっと軽やかで、その天に飛翔する身体イメージは他の女性詩人にはないものだろう。

パーヴェル・ベリツキーは次のように評している。「肉体の感覚、肉体の味、肉体の重さ、肉体の官能、生命の音楽としての分泌の音楽、生命のうなり声。肉体の性交、肉体の受胎、その生、その死、そしてポエジーにおけるその変容する正当化——そこにヴェーラ・パーヴロワのポエチカがある」。またパーヴロワ自身も「アガニョーク」（1999年、第30号）のインタビューで次のように語っている。「あなたが身体全体で（理想的にはかかとの先から髪の毛一本一本まで）共振すればするほど、声は色どり豊かになる。（中略）肉体には空間を把握するために五感がある。そして精神の空間に触れるために詩が必要な。別の人間にとってそれは詩ではない。たとえば画家には絵筆の延長である手が必要ね。何が適合するかは各人各様。私には詩が適合していたわけですね」。

パーヴロワ作品の特徴はなんと言っても、自身の身体を表現することへの渴望である。そして五感を最大限に活用しようとする。その独特な皮膚感覚（思惟の表面は言葉。／言葉の表面はジェスチャー。／ジェスチャーの表面は皮膚。／皮膚の表面は振るえ。）、身体と言語との関係性、身体の音楽性への関心をこのようにうたった詩人として注目すべきであろう。

言語——それは身体の一部。  
私は望まなかったようだ  
言語が身体から分離することを、

言語——それは身体の一部  
そして身体と運命を共にするのだ。

第2詩集『第二の言語』(1998)、第3詩集『切りとり線』(2000)を読めば分かるように、彼女の身体感覚はすでに彼女自身の肉体を超えて、地球外まで拡大し、一種の宇宙創生論的な世界感覚へと発展している。彼女は自身のエロスを意識化する際に、すでに他者の肉体との接触を必要としていないらしい。先ほどのインタビューでパーヴロワはイサドラ・ダンカンがステージで踊った後、感動したワーグナーがやって来て「あなたのパートナーはどこにいますか」と尋ねたというアネクドートに触れている。ダンカンが一人で踊っていたことがワーグナーにはどうしても信じられなかったのだ。そしてパーヴロワは言う。「これが私のセックス。私は一人で踊っているの！」もはや言葉そのものがひとつの身体と化したということだろうか。そして身体＝言葉は抽象的な思考ではなく、行為そのものであり、それを書くことそのことが彼女の詩的言語＝生なのである。「私は〈～について〉書かない。音楽について。セックスについて。死について。子供たちについて。私は前置格で書くのではなく、対格で書くのだ」。

## 『天の動物』から

なぜ私 あなたのいちばんやわらかなものは  
あばら骨から——  
あなたのいちばんかたいものから出来たのかしら？  
だってあなたのはかたくないし、  
やわらかくはならないでしょう  
私のなかで…

私は あなたの二人目の「わたし」  
あなたは 私の二人目の「あなた」  
代名詞には  
長さも高さもない  
あるのは幅だけ それは  
セミダブルベッドの  
緯度と軽度  
そして婚礼のキャンドルと

自然がくれた声  
自然がくれた男根  
これまでこんなふうに闘ったことはない

誰もこんなふうには捕まえたことはない

私のふるさとはどこ？——

あなたの左の鎖骨の

ほくろのそば。

もしもほくろの位置が変わったら——

ふるさとの位置もかわる。

あしたはなあに？ 朝食。二人で朝ごはん、  
あさっても二人で朝ごはん、そして昼食の後、  
子供と一緒に寝る、もしも寝すごして、  
保育所にこの子を連れて行かないことにしても、  
ゆっくり晩ごはん——9時まで、  
番組のお知らせの時間まで——  
何か新しいことでも？ その代わり、この世でいちばん  
大好きな大好きな夫——それはあなた、  
平凡なことも、老いることも、これ以上  
恐れることはない、家は宮殿のお手本であることも、  
あしたは朝食であることも。

ママ、お空は遠くにあるの？

遠くよ。

ママ、海は遠くにあるの？

遠くよ。

ママ、おひさまは遠くにあるの？

遠くよ。

ママ、パパは遠くにいるの？

遠くよ。

女がすべからくそうであるように

私は残酷だ——

私は家庭を希んでいる、

でも頭に浮かんでこない——

未知の家庭は

そのとき崩壊、

でも崩れはしない——

未知の夫をあやすだろう、  
でも欲しくはない——  
夫が家にいても  
目ざわりだろう。

私は運命を受け入れる  
そしてそれを一つの歌の韻につくり上げる、  
あなたが真っ赤に焼けた鉄で  
私の顔に「愛する女」と書く時に。

誰か不幸な人のもとへ天使はやってくる  
私のもとへ人々がやってくる  
誰にも天使は捕まえられる それとも  
人々を捕まえるのか それとも  
私のもとにやってきた天使たちを  
闇の中で人々と取り違えるのか それとも  
人々の中に天使たちを見つけて  
人々が見えないのか

あなたが食べている時、あなたを見るができない。  
あなたが話している時、あなたを見るができない。  
ズボンから足を引きぬいている時、できない。  
私にキスして連れて行く時、できない。  
あなたが眠っている時、あなたを見るができない。  
あなたがない時、あなたを見るができない。  
あなたがまたやって来て、祈りながら、  
食卓につく時、待っているができない。

非力なゴキブリたち。  
ずっと上にいる蚊たち、  
至る所どこにでもいる、  
笑い上戸のハエ、夜の便所の  
ワラジムシ、クモとシミ——  
彼らを理解して、許して、彼らは  
目的がはっきりしている、首尾一貫している、  
私たちの人生とは平行に、

軽々とした体で  
人々に魂を捧げている。

冬は動物  
春は植物  
夏は昆虫  
秋は鳥  
残余の時間は我・女

## 『第四の夢』から

### つれあいの歌（12の発生練習法）

1

ああ原初の園の  
栽培植物  
すべての生命に  
悦楽の転移  
幻惑の上昇  
ああ落ちないように支えて  
すべての空虚に  
細胞たちの生まれ変わり

2

愛の散弾の犠牲となって倒れ  
至福のエアポケットの底、  
おぞましい言語能力を失う、  
先祖伝来の身振り言語能力を取り戻し、  
聖書の身なりをした目の鱗となって  
目が見えるようになる皮膚の長い時間を調べ上げる。  
なんのためにこれほど不安にかられて探り出すのか：  
教えて あなたはどうなの？ 教えて あなたはどこなの？

3

どこ、どこ？  
星の上、  
あなたのあごひげの上、  
夜のシーツのキャンバスの上

婚礼のための裸の上、  
それから

——

どこにでも。

4

夫婦の床、  
夫婦の液体、  
その中にいる誰か。  
——そう二人ともすてき。

5

生命の中に  
    光が現れた  
目がつぶれて  
    目をおおった  
モーゼのように  
    顔をおおった  
私がいいって  
    あなたは気づいた

6

あなたを百万分の一に粉々にする価値もない。  
私是一个の卵を運ぶために一ヶ月を必要とする。  
あなたは様々な顔を照合して、自分を探す。  
私は自分の顔が変わらないように、クリームを塗る。  
多くの人が私を愛した 私をあなたを愛することを教えた。  
私は多くの人を愛した そして一人を愛することを学んだ。  
ちょっと短いアクメ。しかし私のすべての弱さは権力を持っている。  
黄金の切断面。しかし時間はごくわずかしか残されていない。

7

私たちは子羊の毛皮と同じくらいの空を見ている、  
誰かの毛皮帽に気づく。  
恐怖の仕上げ板の上  
私たちは自分の中身を知る。  
私たちは理解する：自分の正しさを証明するものがなにもないことを。  
メソポタミアの沈黙の天使の、  
跋文のさびしい悪魔の、  
大きな黒い瞳を私たちはのぞき見る。



最後の恋人たちのなによりもやさしい不在！  
私たちが子供たちに見つからないように、  
棺の羽ぶとんに、  
私たちはすっぽりと身を隠す。

8

地中の一枚の毛布の下で眠る、  
夢の中でお互いに抱き合う。  
私の中の貯水池の水が  
あなたの身体に流れている。  
そしてみながより深く、より甘く眠り込みながら、  
私は見る：私の腹がふくれるのを。  
喜んで 私のそばで眠る人、——  
睦み合う愛のしるし、  
夜が明けることのない結婚の夜の果実を  
私は地下水から運んだ。  
打ち明けて あなたはこれ以上誰を望むの：  
エゾマツの若木それとも小さなヤマドリタケ？

9

鼠蹊部を耕すものたち  
口腔の耕作者たち  
非難の、羞恥の、  
恐怖の騎士たち、  
中流階級の  
預金者たち、出資者たち、  
小人たち…  
亭主たち。

10

しかし計らないあなたがいくらかなんて計らないで  
死が不死に合流する場所

11

ほとんど中断せずに、傾斜とともに、  
屈曲と結合をむさぼりながら、  
厳格に、丸く、美しく…  
愛撫の書道のセンセイは  
慎重に、細心に、  
献身的に、悲しげに、物知り顔に…

彼は覚えている：肌の上の書き間違いを  
それからどんなことがあっても修正しないのだ。

12

やさしくなんかならない——  
でも彼はいつもずっとやさしい  
強くなんかならない——  
でも彼はいつもずっと強い  
悲しくなんかならない——  
でも彼はいつもずっと悲しい  
役にたつことなんかない——  
でも彼はいつも役にたちはしない